

鞍馬天狗

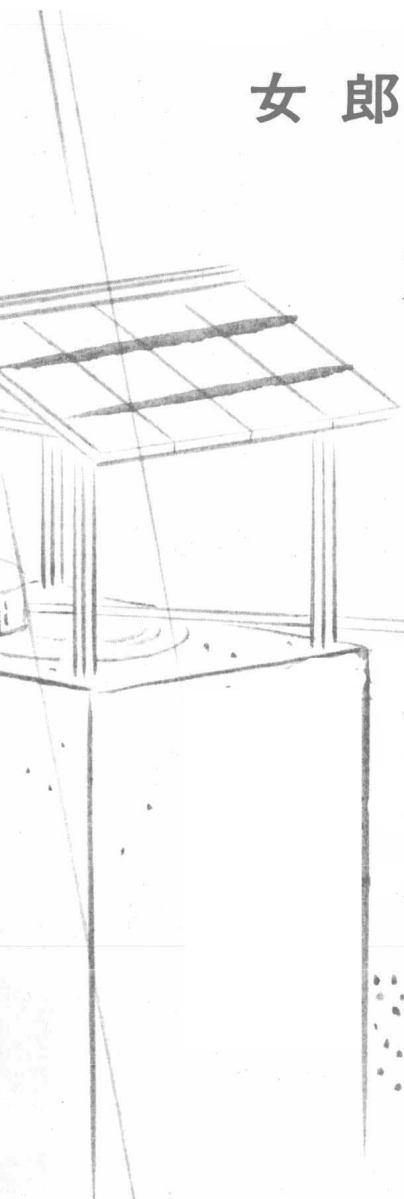
女郎蜘蛛

大佛次郎

天狗

女郎蜘蛛

大佛次郎



サンデー
毎日選集

鞍馬天狗 田

女郎蜘蛛

定価 三八〇円

昭和四十四年九月二十日 印刷
昭和四十四年九月三十日 発行

著者 大佛次郎

発行者 星野慶栄

発行所 毎日新聞社

郵便番号

東京部千代田区竹平町
大阪部北区堂島上
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町

春曙夢……………三

影……………一二

古屋敷……………二〇

思　い　草……………三六

白羽の箭……………五二

まぼろし……………六八

鼠……………八四

雨　の　中……………一〇一

手 函……………一九

朝 茶……………一三七

家 の 中……………一五五

物 陰……………一七三

蜘蛛の糸……………一八九

島……………一九九

装本・挿絵 佐多芳郎

女
郎
蜘蛛

春曙夢

一

ぬくまった夜具の中で、お浅は、ふと目をあけて、まだ家の中に春の夜の闇が厚ぼったく、こもっているのに気がつきました。

ねむりが足りて、もう明け方に近い頃かと思われるのに、確かに階下の土間に新しく客が着いたらしいざわめきが、のぼって来る。

(今時分……)

と、お浅は、不審に思ったのでした。

たしかに自分は、その物音をうつつに聞いて目が醒めたものに違いないが、音と言っても聞いていると、不思議に静かで、かなりの人数が入って来たようにも思われるが、目に立つほどでない。なんとなく、その人たちが、わざと音を忍んで静かにしているような気がして来ます。

起きなおって、枕もとの煙草盆に腕を伸ばしました。暗い中でしたが、見当はわかつていて、手が上手に火入れの上に出て、火気の暖味が、やわらかに肌にうつりました。

灰に埋めてあった火種も、冬を過ぎたから、今時分までたたずに残っていたもの、今度もお浅が上方に來たのに江戸から供をして来て、今夜は次の間に寝ているお春が、女あるじの習慣を知っていて、旅先でも身のまわりのことを自宅にいる時のように、きちんと整えてくれている。

お浅は、持参のきせるを取って、薩摩きざみを詰め、静かに火入れの火をさぐって一服しました。

小さい炭火が枕もとの闇に、ぼっと赤い色をにじませたばかりか、頭の上の天井板から、襖まで、ほのかに明るくしているように見えます。

とん……と、きせるをはたいて音を立ててしまつてから、悪いことをしたと気がつきました。

その音で、襖一重隣りに寝ていたお春が目を醒まししました。起きなおったらしく静かに帯をしめる気配がして、「お目ざめで御座いますか?」

と、襖を細目にあけて、尋ねます。

「ああ」

と受けた声で、お浅のは、挨拶になっています。

「なん時だらうね。もう、明け方かえ」

「もう、そろそろ、白んで来る頃で御座いましょうか」

と、外の気配をうかがう様子で、

「よく、おやすみになりましたか、おかみさん」

一一

「ぐっすりと、何も知らずにだね」

お浅は、布団の上に起きなおって坐りました。

「あんどんをつけておくれ。すこし前に、階下へ、お客さんが来たらしいので、目が醒めてしまったのだよ」

お春は、行灯にあかりを入れてくれました。旅に出るの

に、寝間着も持って出るたしなみのひとなので、行灯の光を受けて浮き上った姿が、人入れ稼業や請負の仕事を夫に

代って女手で引受けている「姐御」としては国貞の一枚絵

から抜け出たようだと言われているが、江戸も深川で芸者に出ていたこと

もあるひとで、亭主の佐兵衛が中気で引込むようになって

から、家の稼業を自分で切り盛りして男たちを顎で使い、

反って、手をひろげてさかんにしたものと、やかましい評判さえある。それがどこに出ても人が振り返って見るくらいに、小股の切れ上った感じの好い女なのでした。

朱羅宇煙管の遊び方から、人の目をひきつけます。

「存じませんでした」

と、お春は顔を染めたようでした。

「すっかり、よく寝込んでしまっています」

「あたしも夢のことかと思って聞いていたが、たしかに、表の戸をあけ、御亭主が迎いに出てさ」

「……………」

「それも、多勢のお連れ様らしい。どこから、おいでたのか随分おそく、夜道をしていらしたのかと氣になったが

……あとが静かなのだね」

「……………」

「したに入ったのは入った。それが消えてしまったように話声一つ立たない。氣になるだろう」

「へい」

「お侍さん方だよ」

「……………」

「お腰のものを縁に置く音がした。それにしては、お話

も、あまりなさらない。どこか穴のようなところに入ってしまったのだろうか。たしかに多勢さまなのだよ」

「おかみさん、見てまいりましょうか」

「おあいにく様さ。それはどの、好い男はいないだろうよ。ただ、気になって起きたと言うだけのこと。他人のことを気にしてもつまらない」

太鼓を打つ音が近くでしました。場所が西国街道の西の宮で、えびす様のお社が近いと聞いて泊まったのですが、そのお社で朝の太鼓を打ったものと見えます。

「外が白んで来ています」

これは、庭に向いた障子の色を見て、そう言ったので、お春が立って、障子をあげて外をのぞいて見ました。

目の前の庭々に八重の紅梅が枝をひろげて咲いている。

「おかみさん、ちょっとおいでなさいましよ」

と、よそに聞えぬように、ひくく抑えた声でしたが何を見つけたのか、おどろきに溢れています。

三

この西の宮も古くから開けた町で、街道に古い建物が多

いでした。この宿屋も、本陣と言った格式の窮屈なものでないが、古風におっとりとした普請でした。

お浅がお春に誘われて見おろした庭の一隅に、かやぶき屋根の離れがあって、花ざかりの紅梅の老樹と向かい合っていました。空が明けて来たばかりで屋内はまだ暗いのですが、障子があけてあって、燭台に灯をともしてあるのが見えます。

そこに白い着物を着た女がきちんとした姿で坐っていました。着物も髪かたちも町のものでなく、お浅たちから見ると異様な感じでした。女の顔がこちらを向いた時は、はっと思っただけにきびしい美しさに打たれました。

名作のお能の面を見るように端正な、気品のこもった容貌でした。年の頃は、お浅とあまり違わず三十を出たぐらいのところでしょうが、年頃には、どんなに、ふつくらと美しかったろうと思われる整った目鼻立ちが、今は、すこし冷たく見えるくらいに静かで、整っているせいで、ろうたけて、きびしい空気を持っているのです。

「御近所の方ではないかい？」

と、お浅は感動を抑えた声で、お春にささやきました。

「わたしは、よく知らないけれど、下々のお方ではない

ね」

「おきれいですが、こわいようで御座います。……」

「何とかの典侍とか、また、お公卿さまの御内室さまなのだろうよ。眉も落して、おはぐろをつけて」

これで、人が家の中に入ってきて来ても、へんに静かな理由がなかった。お供があつても、お次に静かに控えているのだ。お浅はこう気がつくくと、二階から見おろす無礼を人がとがめに来そうに思つて心配しました。

「もう、およしよ」

と、お春をたしなめました。

「うっかりして、馬鹿な目を見ても、つまらない。御家来衆がお供して来ているんだよ」

「……」

「おしめなさい。見つかるといけない」

叱るようにして、ひきさがらせましたが、暗い中に今見た情景は、自分の頭の中に消しようもなく残っているのでした。

「燭台の灯で……内裏様の片方を見たよう。紅梅が緋桃だったらね、雛のお節句になろう」

「どういふ方で御座いましょう」

「さあ、わからない」

と、笑顔を見せて、目が明るく輝き出しました。

「場所が西の宮だ。あれで、おはぐろを遊ばしていなければ『釣り女』のお姫さまとお見立て申してもいい。かつぎをかぶつて、お顔のきれいなのを隠してね」

「えびす様へお詣りなので御座いましょうか」

ふいと、お浅が笑つて、

「いたずらをするよ」

と、言い出して枕もとに置いてあつた自分の紙入れの中から香包みを出しました。大の男がかなわないくらいに働いて大きな仕事を請負つては、暮らしは好き勝手にしている贅沢な女でした。清元や荻江の歌や三味線の芸事から始めて、茶の湯にも熱心なら、お家流の香道もたしなんでいる、仕事で旅に出ても、ひとりで香を聞いて楽しんでいることがある。集めた香木の中にも、めったに見られない名香も手に入れていました。

「あの方様ならば、お香を聞いて悦んでくださるだろう。私のような町のおてんば者から、ほんの気持だけの御馳走にね」

火入れの火を直して、灰を置き、雲母の薄板の銀葉を敷

いてから、その道では四木の中に算えて尊重されている白菊と言う銘の香の細片を、その上に置いたのです。

銀葉を透かして熱を受けて来るにつれ、得も言われぬ好いかおりが立ってまいります。

やがて、このとき、身分のあるらしい女性がいる庭の離れにも伝わって行くでしょう。お浅はそれを思つて楽しい心持でした。昔、どこかのひとが三条の河原を通つていたら、名香のとめきを感じた。他に家はなく側にある乞食の小屋から匂つて来るものなので、おどろいて乞食と話して見ると、もと、風流で鳴らした物持の成れの果だったので、それから親しく、つき合うようになったと話に残っているのをふと思ひ出したことでした。伝法なお浅が女らしく優しく、こちらの心を伝えようとしたとしても申しますか。

「きっと、わかつてくださるよ。あれだけ御立派な方だもの」

四

お春が立つて行つて障子をあけて、香の匂いが庭に流れ

るようにしました。はなれにいたひとは、やがて、その香を聞いて、あやしむように、あたりを見回していたと申します。

それが、どうしたことか、二階を見上げて、つと立つて障子を閉めて自分の姿を見せぬようにした。そればかりか、何かに、おびえたような様子で、離れた座敷に休息していた供の武士が呼ばれて行つて、急に出発すると、ふれがあった。

お浅は、そんなことを夢にも知らずにいたのですが、朝になつて見ると、階下にいた多勢の人たちが、もう出発して行つたと聞いて、意外に思ったことでした。

「なんですか……供のさむらいの一人が、この亭主に、二階に泊まっている客はどんな人間だと、しきりに尋ねてゐるんですよ。なんで氣にしたのですか？」

と、江戸から供をして来て階下に泊まっていたお浅の番頭が知らせました。

「それから、ばたばたつと、足もとから鳥が立つような急がしさで、支度して、出て行つたんです。それも駕籠を家の中までかつぎ込ませ、乗る人間を見せねえようにして連れて出て行つたんで、へんに、もったい振つたことをする

ものだ、と、様子を聞いて気になりましたよ。女らしいんですね」

「どこの御家中か、この家で知らぬわけはなかるう」

「おさむらい様は幡州竜野とかの方たちで、前から御最負になつてゐるとは話してました」

「お大名かえ？」

と、お浅は、あやしんだように、眉の青いあとを寄せて、番頭を見ました。

「竜野のお城なら脇坂さまだね。それにしても、どういう御身分の方だろう。おきれいな方だったよ。女のあたしが、ぞっとするような」

「あいにくと、のぞいて見るわけにもいきません、相手が、おさむらいでは面倒で」

と、番頭は中年の実直な人間でしたが、稼業から、血気の時分の、いさみ肌なところも残しています。

「それに、のぞきに出ようとしたら、にらみつけやがるので。そんな美人なら見ておくのですが、何ですか、こちらの二階のことを気にしているらしいし、うっかり顔を出して、おかみさんの御迷惑になつてもいけないと、遠慮したものです」

「どこから来たのか、聞いたかえ？ 着いた時間が時間だったね」

出かける時、宿の番頭に、それを尋ねて見ました。お浅は、やはり、京都から来たものと見ています。

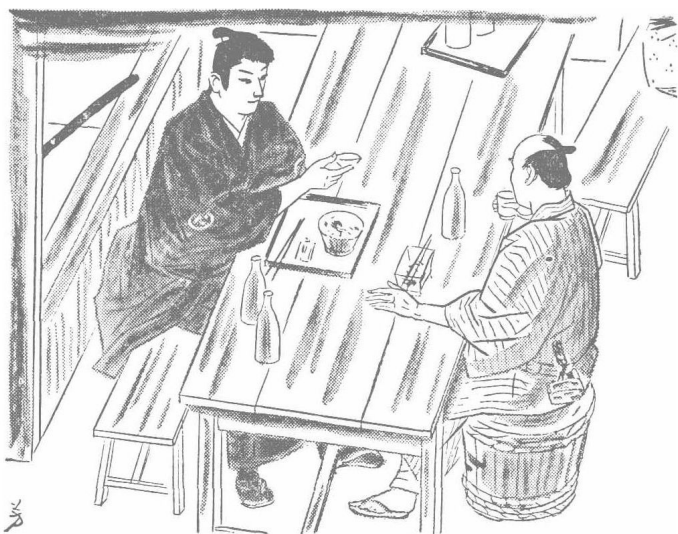
返事は、何ともお話がなかったということでした。だが、この家を出て西国街道を西に下つて行つたことは間違いないので、やはり都を出て来たものと見ていいでしょう。

「夜道をね」

どういふ素姓の女人か？ 何か、わけがありそうなおと、とお浅は見ました。

五

奈良の二月堂のお水取りも終つたので、もう春だと悦んだのが、京では、まだ底冷えする寒さに戻つたようでした。北山に雪が降つたらしく、晴れた昼間、遠くから見ると白く輝いています。町裏の居酒屋の客が話しているのも陽気のことです。だが、もう何と言つても十日の辛抱だ。梅だつて咲いているという。



ひとりの浪士風の男が、連れもなく独酌で盃を重ねていました。

武士と見て町の者は最初用心していましたが、温和な人柄で、ほかの客の話していることが面白いと、聞いていて笑顔になるくらいで、至極おだやかです。諸国の有志とか言って、近頃、京都に集まっている浪士風の人間は、乱暴で議論好きな、一癖ある者が多いのですが、この人物は大小を身につけているが、町の人間の人情とあまり変りないようで、ひよっとすると公卿侍か、寺子屋でも聞いているひとかと思われたくらい、さっぱりした身なりにも、どこか手もとの不如意が知れたようです。しかも、酒は好物で強いらしく、飲むほどに氣力に充ちた若々しい顔色を見せて来ました。身分の区別なくこちらから話しかけたくなるようなところがあります。

「鞍馬天狗とか変った名を名乗って、めっぼう強くて、新選組や見回組が追い回していて、かなわない人間がいるんだってなあ」

武士は、その話を、さり気なく聞き、ちらと目を上げて、その話を持出した人間を見ただけで、また盃をふくんでいます。

関係ないという顔色でした。

「いや、あれは、もう、半月ばかり前に、斬られて死んだって言うぜ」

「ほんまどすか？」

「お町の十手を頂かつてるひとから聞いたのだと、それだって言うぜ。それあ一時、お上でも手を焼いたが、やつと片がついたというのさ」

他の者は黙っていました。その話をあまり、うれしく聞かなかったような空気です。

「そうかね？ 殺されたのか？」

「そう言うが」

がらっと、門口の障子をあけて、人の首が出ました。

「あ、旦那」

と、武士を見て、声をかけたのです。外に立っているの顔はよく見えませんでした。が、屋敷の中間らしい姿勢かたち男でした。

「用か？」

と、武士は尋ねました。

「そこをあけとくと、冷たい風が入る。こっちへ、入れ」
「へえ、ちょっと、お顔を」

武士——鞍馬天狗は立って、外に出て、後手に障子を閉めました。

六

「薩摩屋敷から、お迎いが来たのです。急いで、おいで願いたいって」

「何かあったのか？」

鞍馬天狗は、首を傾げて、こう言うてから、急に出かけることに決めたようです。戸口をあけて、もとに戻ると、勘定をすませて、

「邪魔したな」

と、快活に挨拶して、外に待っている黒姫の吉兵衛のところに出て来ました。

「とにかく行ってみよう。誰から迎いを寄越したのだ？」

「お留守居からと言って、伊知地さんが見えしました」

「待ってるのか？」

「へえ、小橋のところ、返事を待って、おいでです」

鞍馬天狗は、ふところから頭巾を出して、かぶりました。霜が地面に見えるくらいの寒さです。

「今時分、なあ、何事だろう」

伊知地逸平と言う薩摩武士が、やはり寒そうな様子で、待っていた橋の袂から離れて来ました。

「やあ」

と、これに言って、

「吉兵衛、もう帰ってよい」

伊知地と肩を並べて、高瀬川に沿った暗い道を歩き出しました。

「何だね？」

「私も、詳しいことは聞いておりません」

伊知地は、まだ若い、機敏なところがある。

「どうも、へんな話なのです。高倉三位が殺されたと言う

知らせが、お留守居のところに入ったのです。ところが、その時、三位卿は、お留守居のところに見えられて話しておられたのです」

鞍馬天狗は、唇を曲げて、笑いをふくみました。

「それは、どう言うのだ？ そのひとが、そこに居るのなら問題はなからうじゃないか」

「ところが」

と、伊知地逸平は言います。

「その知らせが、書状で来たのですが、日付が、明日のことになっている。それが奇怪でしょう。現に生きてそこにいる人間のことを、死んだと知らせて来ている」

一

「無論、誰かが悪さをしたのだろう」

と、言い捨てるように鞍馬天狗は、申しました。

「折角、拙者が酒をうまく飲んでゐるものを、そんなことで邪魔することはなかった」

「いや、そう言わんで。頼むから、来てくれ、高倉卿も待っておられるのだ」

「おれを護衛にでも付ける気か？ おれは、お公卿さんで奴が嫌いなのだ。生れと家柄を鼻にぶらさげて、出来が特別の人間のように人を見くだしている。あれが嫌いなのだ」

「まあ、そう言いたもうな、あのひとは、島津家の為にも我々同志の為にもなってくれてゐるひとだ。禁裡の若い人たちの間に幕府に楯つく空気をかもしにくれたのは、実に

高倉卿がおられた故なのだ」

「私が行くのを待っているのか？」

「そうなのだ。天狗さん、あんたに限ると言うのだ」

「そんな、おだてには乗らんよ。薩州藩に人がないわけになかろう。多少うるさい仕事になると、我々浪人組に火の中のを栗を拾わせるようなことをする。用がなくなると、知らぬ顔の半兵衛だ」

つけつけと言いたいことを言うが、鞍馬天狗は、その話に興味を動かしていたと見えます。

薩摩屋敷の近くまで来ると、行く手の闇を歩いて行く人影があるのを、注意深く見まわりました。この暗い夜道を提灯も持たずに、二、三人連れで、影のように歩いてゐる者が、こちらが来るのを見たのか、急いで遠ざかって行ったのでした。

「まさか、来ているのじゃなからうな」

「敵が？……」

「あとで、ちょっと見させて置いてくれなにか？ 予告したとおり、早速、高倉卿の帰り途を狙うのではなからうかね」

「……」